「螺旋展画閣」の内部空間に関する一考察

正会員　○田中昭臣*
正会員　　中谷礼仁**

日本建築　　明治初期　　高橋由一
三匝堂　　懸造　　螺旋

１）はじめに

『螺旋展画閣（らせんてんがかく）』とは日本近代西洋画の開拓者、高橋由一が明治 14 年（1881 年）に構想したが、実現しなかった「美術館」である。今回、我々は兵庫県立美術館による「美術館の夢」展[1]において『螺旋展画閣』の模型による実体化の依頼を受けた。残された資料は二枚の立面図と三部の主意書のみであり、その内部空間は主意書の記述によるイメージと立面図によってしか想定しえない。その基本骨格の実体化に際して行った考察をここに報告する。

２）資料の紹介

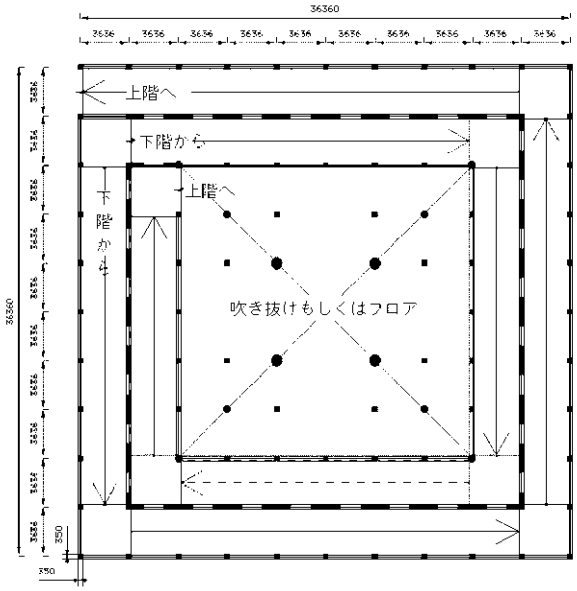
まず、『螺旋展画閣』に関する主意書と立面図を以下に挙げる[2]。主意書における建築形態に関する記述と立面図における主な記述内容は註記とする。

資料 1）「螺旋展画閣創築主意」（明治 14 年 5 月）[3]
資料 2）「螺旋展画閣設立主意」（年代不明）[4]
資料 3）「展画閣ヲ造築セン事ヲ希望スル主意」
　　（明治 18 年 12 月 21 日）
資料 4）「螺旋展観閣略図稿」（年代不明：下図）[5]
資料 5）「螺旋展画閣畧図」（年代不明）[6]

３）空間構成についての考察

本報告では、最も完成度の高い資料 4 の立面図を中心として考察を行う。空間構成に関してはまず、資料 2 に「其構造ヲ螺旋形ニシテ取リ観者ヲシテ右旋左転階路ヲ昇降セシメント欲スルニ因ルノミ」という記述がある。また、資料 4 には「朱經屋内中心ニ在リ　螺旋閣外ニ同シ」とある。ここで「屋内中心」とあるが、立面における閣外の回廊から柱間の半分内側に朱色の補助線が引かれてあることや、「螺旋閣外ニ同シ」という記述から、その「中心」とは建物の中心という意味ではなく内部に想定される閣外と同様のスロープの通路の中心であることが伺える。よって、内部のスロープは外部のスロープに沿って、外壁を隔てたすぐ内側にあるとみるのが自然である。

つぎに、内部スロープのさらに内側を考察する。この箇所については由一による記述はまったく無い。おそらくそこまでの詳細は考えられていないと思われる。平らな平面とするか、吹き抜けとするか二通りの空間構成が考えられる。二重のスロープの内側に平らなフロアがあると想定すると、建物の外壁自体が螺旋を描いて上昇し中心に向かっているため、それを水平なスラブで切ってしまうと、外壁が歪んでしまう。よって、内部スロープが収束するまで、その内側は吹抜であったと考えるのが適切である。しかし、どちらがふさわしいかは考えることができるが、実際に由一がどのように考えたかは不明



である。むしろ、その部分が由一によって考えられていないことを強調したい。これらの流れをふまえたうえで想定される二階平面図を挙げる（前項右下）。三階から五階もほぼ同様の構成と思われる。では、そのような空間構成はどういった史的文脈のもとで発現したのであろうか。

４）『螺旋展画閣』の史的文脈

『螺旋展画閣』の螺旋状に展開する空間の史的文脈は、すでに北沢憲昭によって羅漢寺三匝堂との関連において指摘されており[7]、その一方通行の空間構成から察すると想像に難くない。では、三匝堂はいかにして成立したのであろうか。最初の事例である本所羅漢寺のそれは現存していないが、それを比較的忠実に模した現存作に成身院（せいしんいん）百体観音堂（埼玉県児玉町･1785 創建、焼失後 1911 に再建：下図左）と曹源寺（そうげんじ）観音堂（群馬県太田町･1793 創建：下図右）等がある。

成身院百体観音堂の特徴は、建物の中に一周り小さなもう一つの建物があり、現状でも鞘堂的な形式を残していることである。次に曹源寺観音堂の特徴は、外部と内部を隔てる壁が、多くの箇所で取り外しが可能になっていたことである。つまり、外壁をすべて取り外すと百体の観音をまとった建築の骨組みの姿になるのである。また、三匝堂の多くは太鼓橋が建物内部に設えられていることからも、三匝堂とは建物の内部に自然を想像的に取り込もうとする意図があったと考えられる。

これら「建築内部に自然を取り込む」という流れは、「懸造（かけづくり）」という建築構法に端を発する。「懸造」とは元来、人里離れた山間部にある信仰対象の岩を傷つけず、その上部に堂を建てる構法であるが、近世になると、整地された石垣の上や平地に建てられる形式的な例もみられるようになり、それらの多くは有名な京都の清水寺や滋賀の石山寺を模したものであった[8]。羅漢寺三匝堂は四国･坂東･西国の霊場巡りを一ヶ所に集めたものであったことからも、三匝堂とは平安時代に端を発する「懸造」の構成を市街地において再現するために、建築的構法を巧みに援用した、想像的自然であったとみなすことができる。また、北尾重政『本所五つ目五百羅漢寺栄螺堂之図』や、歌川広重『名所江戸百景五百羅漢さざえ堂』の中で描かれた本所羅漢寺三匝堂の形態が四方懸造の笠森観音（千葉県長生郡･1426 年創建、16 世紀後半に再建）の形態と酷似している点からも伺える。

５）近世以来の展示形式

『螺旋展画閣』が構想された時代は「美術」概念自体が導入されたばかりのころであり、近世の観覧方式の影響を考慮する必要がある。

先にふれたように、本所羅漢寺のタイプの三匝堂は懸造の堂をさらに外壁で被ったものと想定された。そして、（かつては懸造の建物であり、三匝堂においては仏像をまとった）内壁と外壁の間を、内壁に据えられた仏像を拝観しながらめぐるという構成であった。一方、『螺旋展画閣』は、先に示したように内部スロープの内側は考えられていない（右図参照）。つまり、三匝堂において仏像が配された内側の建物は、その機能を失い、観覧方式のみが『螺旋展画閣』に継承されたと考えることが出来る。

６）まとめ

自然を被う「懸造」、それをさらに被った「三匝堂」、その観覧形式を継承し中空になったものが『螺旋展画閣』であると考えられる。そして、『螺旋展画閣』は本所羅漢寺三匝堂の流れを汲んでいると考えられる。

三匝堂といえば正宗寺三匝堂（福島県会津若松市･1796 年）が有名であるが、正宗寺のものは純二重螺旋であり、鞘堂的な空間ではない。各地にある羅漢寺三匝堂を模した遺構の数や、先に触れた懸造との関係からしても、会津若松のそれは突発的な出来事であったと考えられる。今後さらなる調査・考察が必要である。

---

1 開催期間 2002 年、4 月 6 日～6 月 23 日

2 青木繁編『高橋由一油画史料』中央公論美術出版 1983 年

3「館ノ造築概ネ図ノ示ス所ノ如シ　而シテ下室ヨリ以テ一室々々ヲ径テ昇ルノ順序タル其階路ヲ螺旋状ニトリ看客ヲシテ回転シテ昇ラシムルモノタリ　将又援助諸君ノ肖像ヲ写シ之ヲ一室ニ掲ケ　以テ現時ニ将来ニ其創設者タルヲ示サントス」

4「其構造ヲ螺形ニシテ取リ観者ヲシテ右旋左転階路ヲ昇降セシメント欲スルニ因ルノミ」

5「朱經屋内中心ニ在リ　螺旋閣外ニ同シ」「入口間口貳間奥行貳間半　惣間口貳拾弐間四方惣高サ拾九間貳尺五寸　五階迄高サ拾五間四尺五寸　貳階貳拾間四方　三階拾六間四方　四階拾貳間四方　五階八間四方　六階四間四方　壁高サ貳間貳尺　縁側巾六階部一間以下貳間」-A

6「閣内中央ニ螺旋階路在リ進行ノ路上知ラス知ラス昇リテ頂上ノ遠望台ニ至ル　帰途ハ閣外ニ階廊ヲ降ルナリ」　脚注 5-A と同様の規模に関する内容

7 既出『高橋由一由画資料』より北沢憲昭による記述部分。

8 松崎照明『懸造の近世的変容～懸造建築の研究・その３』　日本建築学会計画計論文集第 485 号　1996 年 7 月

*大阪市立大学大学院
**大阪市立大学専任講師

*Graduate Student,Graduate School of Engineering,Osaka City Univ.
**Lecturer., Graduate School of Engineering,Osaka City Univ.